

平成23年 5月27日現在

機関番号：12201  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20530296  
 研究課題名(和文) 「水利共同体」からみた現代中国農村における集団化の成立と解体  
 研究課題名(英文) The Formation and Dissolution of Agricultural Group in Modern Rural China from Terms of Water Community

## 研究代表者

内山 雅生 (UCHIYAMA MASAO)  
 宇都宮大学・国際学部・教授  
 研究者番号：30151905

## 研究成果の概要(和文)：

現代中国山西省の農村の多くは、「改革・開放」経済体制以後、経済のグローバル化の中で大きく変貌している。そのような激しい変動の中で、多くの中国農村は、西ヨーロッパや日本の社会とは違った形態を取りながら、地域の伝統的慣行を保持し、地域住民の共同体的結合によって地域の社会的安定を保持し、その生活と生存を維持している。

## 研究成果の概要(英文)：

I can state conclusively that great changes are taking place in a large number of Shanxi villages in Modern Rural China as a result of the economic globalization that has occurred since the reform of China's economic system. In the midst of this violent change, many villages are adopting a pattern different to that of villages in Europe and Japan, as they maintain their existence and livelihood by preserving traditional local practices and customs by means of "communitarian"-type linkages among local residents.

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：中国近現代史

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：水利灌漑、水利共同体、農業の集団化、モラル・エコノミー

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、2005年から2007年に研究補助を受けた基盤研究(C)(一般)課題番号17530258の『「水利共同体」からみた現代中国農村における国家と地域社会』の継続研究である。前

研究においては、①1950年代に推進された「農業の集団化」の過程における水利灌漑事業に関する先行研究を、東洋文庫等で収集する。②河北省および山西省の地方志から、1950年代から現代に至る水利灌漑システムに関す

るデータを抽出して、黄河下流域での水利政策および「水利共同体」の実態像を検討し、農業の集団化過程における水利政策を確認する。③満鉄調査部を中心とする、戦前期の日本側調査機関による華北農村調査において水利灌漑システムの検討対象とされた農村が所属した河北省邢台市および山西省臨汾市で、当該地の水利灌漑システムの歴史の変遷状況について、関係者へのインタビューを含めて関連資料を収集し、併せて近年の改革開放政策の下で、伝統的結合論理として宗族的結合と地縁的結合の関係を確認するというものであった。

研究成果として、河北省・山東省、そして山西省を中心に、土地改革時の水利灌漑システムを、現地で収集した文献資料および関係者へのインタビュー等で明らかにすることができた。そして、その成果を拙稿「現代中国農村における水利灌漑について」（弭麗峰と共著、宇都宮大学国際学部編『宇都宮大学国際学部研究論集』22号に所収）、および「中国『共同体』論と東アジア共同体」（弁納オー・鶴園裕編『東アジア共生の歴史的基礎—日本・中国・南北コリアの対話』、御茶の水書房、現在印刷中）に発表した。

(2)しかし、研究対象地域の山西省農村について、1950年代前半から1960年代後半に至る期間の、村レベルでの集団化成立過程の実態を説明する、上級機関からの命令書、および農民の対応に関する幹部の報告書等の文書を発見する機会に恵まれた。現在その一部は、山西大学社会史研究センターに保管されているが、未調査村も多く、かつ既調査村も含めて、関係者の多くは高齢でもあり、早急な調査が必要である。関係者のへ聞き取りを含めて、これらの資料を日本側研究機関による調査資料と比較検討すれば、土地改革時期の「共同体」からみた国家権力と地域社会の関係を、現在までの政治過程と関連させて検討し、「共同体」およびその遺制の実態をより明確にすることができると判断し、「研究計画最終年度前年度の応募」に該当すると判断し、継続研究として応募し、2008年から2010年度の研究を認められた。

## 2. 研究の目的

本研究は、鄧小平体制下で「改革・開放」政策を実施し、2010年度GDPで日本を抜き去り、アメリカに次いで、世界第2位の経済力に象徴されるように、世界経済と直結し、文字通りグローバル化した世界の一員としての役割を果たすことが求められている現代中国農村社会において、「水利共同体」をキーワードとして、水利灌漑システムの実態から集団化の成立と解体を解明し、現代アジアにおける国家権力と地域社会との関係を考

察するものである。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、中国に現存する治水・灌漑を含む水利に関する文献資料の収集と、戦前期の農村調査および近年中国で実施された農村調査の成果の分析に区分される。

農村調査に関しては、水利灌漑を中心とする公共関係が崩壊しつつある湖北省の事例と、それとは反対に継続発展する山西省を事例として検討対象とする。

## 4. 研究成果

(1)3年間の研究期間全般を通して、現代中国における「農業の集団化」の成立及び解体の総過程に関する研究を、水利灌漑システムを中心に、東洋文庫等で収集した。

(2)湖北省や山西省の地方志から、水利灌漑に関する資料を収集し、そこから当該地域での水利政策を、国家レベルでの水利事業と、地方レベルでの水利政策に分類し、相互比較から、文献資料に描かれた「水利共同体」の実像を解明した。

(3)阿古智子の湖北省に関する研究（『貧者を喰らう国 中国格差社会からの警告』新潮社2009年）を参考にすると、阿古の研究の特徴の第一は、湖北省沙洋県高陽鎮の農村を、2002年から定点観測していることである。

農民との継続的な接触により、1990年代から現代に至る「改革開放経済政策」の歴史的な変化の中で、農村構造のダイナミックな変化をとらえている。

(4)彼女の農村研究の第二の特徴は、農村社会の変化を単なる事例紹介にとどまらず、公共関係が崩壊している地域を、「社会関係資本」(social capital)が発達せず、その結果「コミュニティ・ガバナンス」(community governance)がうまく機能しない地域として研究していることである。むしろ「社会関係資本」は、欧米の社会学から発信された概念だが、阿古は、「中国にも類似する概念」として、「関係」(guanxi グアンシ、人脈・コネクションの意)を取り上げているが、費孝通の「差序格局」から「社会圈子」(社会関係の範囲)も説明しているので、その農村社会論は単純ではない。従って、本稿では「社会関係資本」に関する議論自体については、論及しない。

(5)ところで阿古は、湖北省沙洋県高陽鎮を共同研究している華中科技大学教授の賀雪峰の研究を引用して、当該地の特徴を以下のようにまとめている。

- 1) 敬老精神に欠ける者が多く高齢者は行き場を失っている。
- 2) 計画生育(いわゆる一人っ子を中心とする産児制限による人口政策)が順調である。

- 3) 宗族意識が希薄であり大半の村では宗族関係はほとんど消滅している。
- 4) 村内に家を新築する者は少なく、新居は可能な限り道路沿いや鎮に建てようとする。
- 5) 出稼ぎに出た者の多くが村に戻ってこない。土地を守るという意識が失われつつある（特に若者はほとんど関心を示さない）。

従ってこのような状況下で、「治理」（ガバナンス）の著しい悪化が見られるという。例えば、

- 1) 道路、ため池、堤防などのインフラ整備を怠っている。
  - 2) 娯楽が少なく大抵の者は農閑期や暇な時に麻雀ばかりしている。
  - 3) 多額の債務を抱えている村が多い（債務のない村は10%未満）。
  - 4) 電気代の流用や盗電が度々起こるため電気代を支払う者が減り頻繁に電気が不通になる。
  - 5) 治安が悪化し泥棒が増えている（収穫前の農作物や建築現場に置いてある資材を盗む者もいる）。
- (6) 1990年代後半から2000年代初期にかけて、過重な税や費用徴収に憤った村民たちが、税や費用の支払いを拒否したため、高陽鎮の各村は多額の債務を抱えているという。そこで鎮政府と村当局は、上級機関への上納義務を果たすために、高利貸などからの借金で不足分を補ったため、債務はさらに膨張した。そのような状況の中で鎮政府に不信感を強めた村民たちは、政府が新たな公共事業を計画しても、協力しなくなったという。高陽鎮のY村は、もともと水利条件が良く、干ばつでも収穫高が減ることはめったになかったが、鎮政府への不信感を強めた村民による水利施設の保全は放棄され、灌漑効率が低下した。中でも1976年に建設されたポンプ場は、メンテナンスを怠ったため、周辺4村の1500ヘクタールを灌漑する能力は、半減していた。にもかかわらず、Y村の抱える負債141万3600元のうち、ポンプ場の負債が大半を占めていた。
- (7) 阿古によると、その原因の多くは、管理コストの増大と農業税の廃止による受益者負担の原則による取水料金設定だという。農地の水利条件を無視し、単純に取水時間や耕地面積に基づいた分担金では、かえって公平にならないという不満が村民の広まったようだ。赤字となったポンプ場は、民間企業に売却された。しかし、受益者負担を不公平だと考える村民の中では、共同水利に頼らず、自家用の井戸を掘り、小型ポンプとビニールホースで取水する農家が増加して、民営化の弊害が起きているという。
- (8) 以上のような公共的関係の崩壊について、

「現在の中国農村では、自分の権利を主張するばかりで、他人の尊重や社会的責任感に欠ける自己中心的な『公德心のない個人』が目立つようになってきている」と指摘するカリフォルニア大学ロサンゼルス校教授のイェン・ユンシャンの研究をヒントに、阿古は次のように述べている。

「国家が市民生活への関与を減少させる一方で、人々はグローバル資本主義経済に影響された営利主義を急スピードで吸収している。また、計画出産政策や出稼ぎ労働によって、夫婦関係、家財の管理、次世代の育成、敬老意識は大きく変化し、公共意識の衰退、社会秩序の悪化が著しいというのである。毛沢東時代、中国の人々は組織的に動員され、集団営農や政治運動などの公的な活動に参加する傾向が強かった。急激な市場経済化によって家族や地域の社会的機能が失われる中、このような「組織依存」の体質は変化を迫られており、一方で道徳・イデオロギー面にも空白が生じたことから、「公德心のない個人」が生まれやすくなっているのではないだろうか。

(9) 果して「公德心のない個人」(uncivil individual) という概念それ自体が、近代市民社会という枠組みを超えて、どこまで現代中国農村を説明し得るのか、気になるところでもある。しかし村民に連帯感を持たせる社会的関心や道徳的義務感を醸成する社会結合が、公共的關係が崩壊した農村に求められている実例として、阿古の湖北省農村の研究を読み解くことができよう。

(10) 一方、現代中国農村における公共的関係の維持・再生と伝統的要素を山西省の事例から検討してみる。

前研究でも紹介したが、2003年に中華書局から発行された、『陝山地區水資源與民間社會調查資料集』(全4巻)のうちの第4巻『不灌而治』と題する資料集には、「四社五村」と呼ばれる地域の不灌漑水利組織(生活用水利用組織)に関する史料が記載されている。日本での水利研究の第一人者である森田明によると、この資料集は、フランスと中国による、1998年から2002年にいたる5年間の共同研究の成果であり、「水冊」とか「水利簿」と呼ばれる水利のルールを記した冊子などの関係資料の発掘と同時に、調査地域の住民に対する聞き取り調査も含まれているという。

(11) 筆者は、山西大学副校長の行龍や、山西師範大学副教授の徐躍勤の協力を得て、2006年10月、2007年8月、2007年12月、および2008年12月の4回にわたって、四社五村のうちの橋西村と義旺村および橋東村で、村幹部から過去の水利関係の実情と現在の状況に関する説明を受け、さらに近隣地域との水の配分を約した水冊を閲覧した。

山西省の各地では明清以来の伝統的慣行により、民間の自治組織が水利組織を形成していた。この自治組織は「社」と呼ばれ、水脈にそって複数の村が水の利用の為に作った組織であった。従って社とは自治制を持った「水利共同体」である村落連合とも言える。(12)しかし、中華人民共和国成立後、多くの民間の水利組織は、用水の確保の厳しさから、その運営を国家管理に委ね、それまでの「水利共同体」は事実上消滅していった。ところが、山西省中部の山岳地帯に位置する霍州市と洪洞県の境界にまたがる地域には、明清時代の水冊に依拠した村落連合とも言えるべき四社五村が存在していたことが、フランスと中国の共同研究で明らかになった。なお、四社五村とは、霍州市と洪洞県にまたがる4つの社と5つ目の村の総称である。

これらの地域では、前述の「不灌漑水利組織」という名称が示すように、飲料水も含めて生活用水を確保するのがやっとで、灌漑にまわす水の供給は不可能に近かった。

(13)2007年12月と2008年12月の2回にわたるインタビューの中で、霍州市水利局幹部は次のように説明してくれた。

四社五村では、近年でも水源の水を利用するルールをめぐって、頻繁にトラブルが発生した。四社五村の水利は全て飲用水となり、灌漑用にまわす余裕はなかった。そこで、灌漑用には、山西省における大河である汾河からの水に頼らざるを得なかった。汾河からここ霍州市内までは、30 km余りも離れていた。汾河には9つの支流があった。その一つから電気モーターを利用して汾河の水を汲み上げて、霍州市や洪洞県を灌漑する2か所の灌漑区が作られ、約4万畝の水田が灌漑されるようになった。霍州市が所属する七里峪灌区では、2002年に水道管が所属する各村まで繋がり、村の飲用水問題が解決した。

義旺村では、2003年に井戸を掘り、水道管で村まで水を引き、貯水池を作った。以前の貯水池は、石で作られており、その貯水量は400立方メートルだったが、コンクリートで新たに作られた貯水池の貯水量は、200立方メートルだった。その水は主に劉家庄等に提供された。これらの工事は「義旺工程」と呼ばれ、その経費140万円のうち、国家が55万円、四社五村が71万円、霍州市と洪洞県の地方政府が残りを支出した。

四社五村は、霍州市と洪洞県という二つの行政地域にまたがって存在しているので、現在でも地方政府は、水利問題に介入しにくい。山西省には水利工事に関する管理条例が定められているが、地方政府は伝統的な水利慣行を尊重し、四社五村の中心的な村で、最も大きな社の中心である義旺村に調整を任せていた。最近では、洪洞県側の村でも井戸を掘って水利問題を解決したため、1980年代以

降、村同士での水のトラブルは少なくなった。現在、義旺村には深さ200メートルの井戸がある。洪洞県側には、深さ170メートルの井戸がある。

(14)一方、橋西村については前共産党橋西村支部書記の張玉賢が、義旺村については元書記の郝繼紅が、橋東村については元書記の董歩雲の証言から、次のようなことが明らかになった。

この地域では、1960年代中頃の「四清運動」の頃に、霍山の水源から地下に管を埋めて水を通した。当時は、一月に8日間水を使うことができた。水を分ける方法は、昔からの慣習に従った。村では井戸を掘ることもした。井戸を一つ掘るには、ポンプや電気工事代も含めて、10万円くらい必要だった。しかし井戸を掘った後も、四社五村の連帯感が残った。現在の村の灌漑面積は200畝から300畝程度だ。この地域での取水は、旧暦を用い、洪洞県が14日間、霍州側が14日間と決められ、洪洞県の橋西村・杏溝村と霍州の義旺村・南李庄がそれぞれ7日間、霍州の孔潤村が3日間（そのうち、1日は隣村の劉家庄）となっていた。毎年、「祭社」（「祭」を主催する当番の村）が四社五村から費用を徴収した。祭社は、水神である龍王を祭る「龍王廟」近くの水源を見て保守点検・工事を行う「小祭」と、その工事終了後に工事の点検を行う「大祭」を開催した。さらに4月初旬の清明節の時に「吃席看戲」（宴席を設け、芝居を見る）が行われた。その費用は祭社の村が負担し、1980年代には3日間で数千元から1万元を要した。その後、数百円で映画を上映するようになり、2000年以降は経済的事情も関与して、映画の上映もしなくなった。

1970年代には、水利をめぐって各地で紛争が起きた。80年代になって、四社五村以外の他村も四社五村の水源の水を利用するようになったが、これらの村には水の管理権はなく、干魃が発生した時は、四社五村の取水が優先された。

1981年、北京師範大学教授の董曉萍等の調査によって水冊が発掘された。この四社五村の水冊は漢代に作られ、元末に消失したが、明初に再び作成された。現在の水冊は、1984年に作成された、清代の水冊の写本である。

水利以外で四社五村が協力することはあまりないが、小麦の収穫作業は村同士で助け合う。洪洞県の橋西村は海拔が低いので早く収穫することができ、一方霍州は海拔が高いため収穫時期が遅い。そこでまず霍州の農民が洪洞県で小麦の収穫を手伝い、その後洪洞県の農民が霍州で小麦の収穫を手伝った。(15)この「水利共同体」的村落結合は、水源に近いところに建設された龍王廟での宗教行事での協力を梃子に強化された。そして、この村落結合は、水資源の配分を行うだけで

なく、山岳地域での高低差による農作物の収穫時期の差を利用した、労働力交換等の農業面での協力関係の実施主体ともなっていた。むろん現代でも、社が「水利共同体」としての機能を発揮し、村民に社としての一体感を保持させるためにも、龍王廟での宗教行事は、結合を維持するために欠くことのできない要因の一つであったであろう。

事実、橋東村で34年間も共産党書記を務めた董歩雲によると、社の代表である「社頭（いわゆる社首）」は、中華人民共和国成立以前は、村長が兼任し、共和国成立後は、共産党書記が兼任するようになり、水利にかかわる時のみ、社頭の名称が使われたという。

また、橋東村は、かつて「永安城」と呼ばれた大きな村であったので、四社五村の「首村（第1の社）」を務めてきた。董によれば、村とは自然村のことで、社とは徴税の単位だという。徴税のために、50戸の村を社と呼び、50戸に達しない村は、近隣の村と合わせて、1つの社としたという。

(16)ところで、義旺村の郝継紅の家には、清代に作られた水冊の写本が保管されていた。写本を見ているうちに、壁に貼られた「聖母聖心像」と書かれたマリアの肖像画が眼に入った。クリスマスが近いので飾られたのかと思って尋ねると、郝の家は代々のカソリック教徒とのことであった。郝は前述の『不灌而治』と題する資料集にも登場する、いわば四社五村のキーパーソンでもある。従って、四社五村の水利を中心とする公共的事業を推進した彼の社会背景を考慮すると、龍王廟での宗教行事が、結合を維持するために欠くことのできない要因の一つであったことを再考すれば、筆者にとっては壁に貼られたマリア画は意外であった。

しかし、共産党幹部であり、伝統的な宗教施設を管理する地域の指導者であったから、まさかカソリック教とではなからうとした筆者の見方こそが、郝への勝手な思い込みだったかもしれない。むしろ、山西省の山岳部農村における公共的事業を維持し発展させ、村民の結合を強化するための「宗教行事」自体は、必ずしも個々の村民の宗教的信念とは完全に一致する必要もなく、単に慣習的要素として機能していると理解すれば、筆者の抱いた「意外さ」は簡単に消滅する。従って、前述した湖北省と違って、内陸部の山西省の、それも太行山脈の麓という厳しい自然状況の中だからこそ、現代の四社五村では、かえって一見緩やかな伝統的な慣習的理念を紐帯とした人的結合が、公共的關係として維持・再生していると考えられよう。

(17)以上、現代中国農村における公共的關係が崩壊する例として湖南省の事例を、維持・再生する事例として山西省をとりあげた。広大な中国社会における複雑性を考慮すれば、

たった2省の事例では、拙速な結論を出すべきでないだろうが、少なくとも溝口雄三が問題提起したように、「公共」領域は、その空間的大きさを問うことを別にすれば、「天下」として把握したほうが、実情には合致するようだ。では古代から近代に至る、中国社会における国家、つまり王朝とは、地域社会にとっていかなる社会的役割を果たしてきたのだろうか。

そのうえで湖北省と山西省の事例のように一見対立するかのようには見えざる現象を分析する際には、阿古が「地域における秩序形成や文化の醸成を図れば、地域社会の凝集力を強めることができ、公共事業にも効果が表れる」というように、「社会関係資本」の問題も含んで、当該地域の伝統的要素と人的結合関係から、その社会構造を考察することが求められている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

1. 内山雅生、「発展中の現代中国農村社会史研究」、『山西大学学报哲学社会科学版』33巻3期、2010年、143-144頁。

2. 内山雅生(共著)、「中国内陸農村訪問調査報告(1)」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』11巻、2010年、325-330頁。

3. 内山雅生、「山東・山西・河南省での農村調査」、本庄比佐子編『戦前期華北実態調査の目録と解題』(財)東洋文庫、2009年、31-43頁。

[学会発表] (計 1件)

内山雅生、「從“共同体”理論看“集体化時代的中国農村社会”」、集体化時代的中国農村社会国際學術研討会、山西大学、2009年8月8日。

[図書] (計 1件)

内山雅生、『日本の中国農村調査と伝統社会』、御茶の水書房、288頁、2009年。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

内山 雅生 (UCHIYAMA MASAO)  
宇都宮大学・国際学部・教授  
研究者番号：30151905